

# 東京バッハ合唱団 月報

[第 709 号] 2021 年 7 月号

〒156-0055 東京都世田谷区船橋 5-17-21-101

Tel: 03-3290-5731 Fax 専用: 03-3290-5732 郵便振替: 00190-3-47604

Mail: office@bachchor-tokyo.jp http://bachchor-tokyo.jp/

BACH-CHOR, TOKYO

Monthly Newsletter No.709

July 2021

5-17-21-101 Funabashi,  
Setagaya-ku, Tokyo

## 創立 59 周年。この一年も、感謝をもって振りかえる日を切望

大村 恵美子 (主宰者)

1962 年 7 月 1 日、私の呼びかけで、20 名の有志が集まって J.S. バッハのカンタータ第 1 番 *Wie schön leuchtet der Morgen Stern* (BWV 1) を、私の訳の《あしたに輝く たえなる星よ》の日本語で練習を始めたのがこの合唱団の誕生日でした。その時から 59 年。

今、2021 年 5 月 24 日早朝、私は、また例のとおり夢を見ました。世界中の、文明の開けた都市ではなく、小島とか、人口の少ない不毛の里のような所で、いたるところ、一斉に教会が建てられて、事業を開始したという夢です。どのような組織、仕組みで、その存続を確保されるのか、そういう現実的な説明は、何もまだ考え及ばず、ただ、殺されたり、傷つけられたりする人たちを守り、食を断たれて餓死しそうな人たちに、最低限の食料を施すという、それだけのことを、全世界的に合意したあげくに、実現にとりかかったところ です。——

この夜までの一日 (5 月 23 日)、14 時には、私は小金井のホールで、アルモニア ディ ムジカ主催、日本ヴァイオリン後援の『西川豪ヴァイオリン・リサイタル 2021』を聴き、21 時には、テレビで田村正和追悼・松本清張『疑惑』というドラマを見たのですが、その影響をもろに受けた夢を見たのでした。

西川豪さんは、ピアニストをお父様、ヴァイオリニストをお母様として、ソロ・ヴァイオリニストに円熟され、広く活躍を開始された新進気鋭の方で、私たちは、ご両親とのお付き合いも古く、彼のこの世に生まれる前から知っているのです。

その豪君が、コロナ禍真っ最中に、赤字を覚悟で、シューマン、ベートーヴェン、フランクの名曲を聴かせてくださり、演奏の素晴らしさもさることながら (岩船今日子ピアノ伴奏)、人生全般について、いろいろ深く考えさせられました。

また、夜のテレビで見た松本清張のドラマも、他界されたばかりの俳優・田村正和を追悼する番組でしたが、人間の相互不信をテーマとしたものでした。為政者は、一般民衆からあらゆる手段でお金をまき上げて、なるべくその多くを自分たちのものにする、一般民は気づいて、相互の敵対運動が始まる。民主化されても、いずれ継続の過程で独裁化に陥ってしまう——。そんな、人類のどうしようもなさを描くドラマでした。

それらのショックから生じた、私の教会の夢は、ま



■ 鋼釣草、別名は「華鬘 (けまん) 草」(撮影: 千葉光雄・団員)

だ何の解決にもなりません。実際、現存する新しい教会も古い教会も、神道・仏教・キリスト教・イスラム教を問わず、同じ教えの中でもすぐさま分裂し、殺し合いにまでなってしまう。

話せば長くなるので急ぎますが、私の信じるところでは、生々しい利害関係だけに視点を置かず、みんな同じ人間じゃないか、わずかな、この地上生活 50 年、100 年を、仲よく楽しく暮らそうよ、と呼びかける集いを、宗教などと思わず、みんなの心の飢えを癒すものとして、はやらせてはどうでしょうか。それには、近視眼的なプラス・マイナスの心の動きから、広い視野での、いいな、美しいな、呼吸が楽だな、と感じる、芸術を解する感性を養ってほしい。

具体的な説明をすると長くなりますので、これだけを訴えて、生きにくい、住みにくい、コロナ禍支配の今この時を、「よく切り抜けたなあ」と、感謝をもって振りかえる日を切望して、終わります。

### 創立 60 周年記念公演、会場と曲目が決定!

#### ● 第 121 回定期演奏会

2022 年 5 月 14 日 (土)、杉並公会堂大ホール

——「還暦」、万感の思いを込めて——

- ・カンタータ第 21 番《われは 愛いに沈みぬ》BWV 21
- ・カンタータ第 1 番《あしたに輝く たえなる星よ》BWV 1
- ・カンタータ第 147 番《心と日々のわざもて》BWV 147

### 月報 2021 年 7 月号 CONTENTS

- ・バッハ・カンタータの情景…「三位一体節後」前半…p. 2
- ・《けまん草》の創立 60 周年祝い (大村恵美子) ……p. 3
- ・連載: 退屈するのはいそがしい [5] (大野博人) ……p. 4

## バッハ・カンタータの情景 №4

大村 健二 (団員)

コラール・カンタータ年巻から、「三位一体節後日曜日」前半の情景 (1)

- ・BWV 93 《ただ主に拠り頼み》三位一体節後第5日曜日
- ・BWV 113 《イエス 高さ宝》同 第11日曜日
- ・BWV 78 《イエス わが心を》同 第14日曜日

われわれの日本語版楽譜のストックでは、復活節およびその後の昇天祭までの5, 6週用の(復活節後)カンタータが合計6点発刊されていて(BWV 4, 6, 42, 67, 104, 166)、まずは時節柄、それらを取りあげて、既刊カンタータ楽譜の紹介を始めてみました。

前回にいたり、話題のなりゆきでバッハのライプツィヒ第2年巻=コラール・カンタータ年巻が視野に入ってきたのですが、既刊楽譜中には、この、いわゆる「コラール・カンタータ年巻」(1724年6月~25年3月、当初全40曲)に属するものが17点も含まれることになりました。ここでは、当合唱団がコロナ禍に振り回されて、もう2年以上も抱えつづけている教会カンタータのうちの3曲が、たまたま当年巻の巻頭近くに置かれていましたので、そのあたりから紹介をつづけていきたいと思います。中止・順延のあげくの、今夏の小布施公演(下掲)と10月予定の教会コンサート(120回定期の代替)で雪辱を果たす覚悟の曲たちの、紹介を兼ねます。今度こそ、実現されますように!

……そして、聖霊降臨節の大祝祭日と三位一体節は目前です。ひと月後には、バッハの一大プロジェクト「コラール・カンタータ年巻」が始まります。構想は、すでに固まっているように見受けられます。……と、前回は閉じました。ゼバスティアンの心中の構想が固まったか、どうかなど分かるはずもないのですが、

### ●小布施特別演奏会 (第3回)

[日時] 8月7日(土)、午後2時開演  
 [会場] 長野県小布施町・おぶせミュージアム  
 [プログラム] 「多様性のバッハ」(仮称)  
 ・カンタータ第113番《イエス 高さ宝》BWV 113 より①⑧  
 ・カンタータ第93番《ただ主に依り頼み》BWV 93 より①⑦  
 ・カンタータ第78番《イエス わが心を》BWV 78 全曲  
 ・無伴奏チェロ組曲「第4番 変ホ長調」BWV 1010  
 ・ソプラノアリア「主を仰ぎ望み」(BWV 93 より)  
 ・珈琲カンタータ《お喋りはやめて お静かに》BWV 211 全曲  
 [演奏] ソプラノ 光野孝子、室内楽 ARS メンバー、鍵盤 田尻明葉、指揮/訳詞 大村恵美子、東京バッハ合唱団

◎昨夏はコロナ禍のため、信州ツアーの全行程を中止としましたが、今年は小布施にしばらく、日帰りで実施の計画です。ご近所にお出かけの節は、ぜひお立ちよりください。

そんな気がします。

復活祭から40日目の昇天祭を経て、初夏、3日続きの「聖霊降臨節」(1724年は5/28~5/30)を迎え、翌週の「三位一体節」の日曜日に至りますが、日曜・祭日ごとに礼拝でカンタータを上演する、というバッハのライプツィヒでの職務の第1年次が、この日をもって終了しました。ご存じのとおり、教会暦順のこの1年間のストックを「第1年巻」と呼んでいます。

そして、翌週から新たに立ち上がったのが、カンタータ第2年巻、すなわち「コラール・カンタータ年巻」だったのです。バッハは、新しい1年を「コラール・カンタータ」の可能性の追求に費やすことになるのですが、その決断をどの段階でくだし、年間60作ほどの職務の全体を大きなスケールで構想し、いつ、その準備にとりかかったのか?

われわれは、すでに前々回(707号p.3)、前回(708号p.3)と、《ヨハネ受難曲》制作への全力投球のために、その前後の週で力を抜いたことに触れましたが、初演年代順の年表からは、同じような省力の実態が見えてくるのです。見たとおり、《ヨハネ》初演に関しては、斎戒期を含んでの前後10週間ほど、新作の上演が途絶えました。では、「コラール・カンタータ年巻」プロジェクトの立ち上げ時期はどうだったか、というと、やはり“手抜き”(質が高すぎますが)が見られます。

前回とり上げたBWV 166の新作初演に始まる4作品(昇天祭を含む前後3週分、BWV 86, 37, 44)は、聖句に始まり、器楽の活躍するコラール編曲を経て、4声体コラールで閉じる、という緊張感にあふれた佳作ぞろいではありますが、編成・構成ともに簡素な小品でした。この最後のBWV 44をもって、第1年巻での新作上演は最終となりました(5/21、復活節後第6日曜日)。この4連作の過程で、コラール旋律の潜在力、コラール歌詞の多様な発展性などに、あらためて新鮮な可能性を見出したのではないのでしょうか。大祝日3日分の復活節カンタータがすべて、再演または旧作改編だった(《ヨハネ受難曲》への注力で、新作準備の余力がなかった?)のと同様、上記4作品の新作上演につづく週の、聖霊降臨節大祝日3日分も、これまたほぼ再演と改作で占められました。この数週間が、来たるべき「コラール・カンタータ年巻」の構想に費やされたことは、想像に難くないと思うのです。

この回から取りあげるコラール・カンタータを、初演月日の順に、再度、整理しておきます(1724年)。

- ・7/9 初演: BWV 93……「第2年巻」の第6作
- ・8/20 初演: BWV 113……同 第11作
- ・9/10 初演: BWV 78……同 第15作

因みに、われわれの既刊譜にはBWV 178があり、ここに並べれば7/30初演(同第9作目)の位置の作品なのですが、小布施公演の曲目ではないので別の機会としました。今回はスペースの都合上、BWV 93《ただ主に拠り頼み》だけを、先ずはとり上げます。

## ■カンタータ第93番《ただ 主に 投げ頼み》

Wer nur den lieben Gott läßt walten BWV 93

[教会暦] 三位一体節後第5日曜日 (他に BWV 88)

[使徒書] I ペトロ 3, 8-15 (苦難にあつての忍耐)

[福音書] ルカ 5, 1-11 (ペトロの大漁)

[成立] 初演 1724年7月9日、ライプツィヒ

[歌詞] 台本作者不詳。コラールカンタータ。基本コラール: G. ノイマルク

Wer nur den lieben Gott läßt walten (ただ主に投げ頼み) 1641/1657 [BCH-142]。

第1, 4, 7曲は同コラール第1, 4, 7節。中間曲は同第2, 3, 5, 6節の書き替え。

[上演用訳詞] 大村恵美子 <http://bachsmusik.starfree.jp/bwv93.htm>

[編成] 独唱 SATB、合唱、器楽 Oboe I/II、弦合奏、通奏低音

[楽曲構成]	訳詞冒頭句/原詞冒頭句	編成/調
1. 合唱	ただ 主に依りたのみ Wer nur den lieben Gott läßt walten	ob I/II, str., bc ハ短調
2. レチタティーヴォと コラール(B)	憂い われに甲斐なく Was helfen uns die schweren Sorgen?	bc ト短調
3. アリア(T)	十字架の時 いたらば Man halte nur ein wenig stille	str., bc 変ホ長調
4. 二重唱アリアと コラール(S/A)	み神は 知りたもう Er kennt die rechten Freudenstunden	str., bc ハ短調
5. レチタティーヴォと コラール(T)	空 荒れくるい 猛り Denk nicht in deiner Drangsalshitze	bc
6. アリア(S)	主を仰ぎのぞみ Ich will auf den Herren schau'n	ob, bc ト短調
7. コラール(合唱)	主に歌い 祈りて Sing, bet und geh auf Gottes Wegen	ob I/II, str., bc ハ短調

(演奏時間 18分)

[上演履歴] 1995 (#77)、2004 (#95)、2021 予定 (#120)

[日本語版楽譜発行] 2003年「50曲選」、ISBN978-4-925234-38-2 (¥1500)

[録音] CD「50曲選」Vol.12 (2004年録音、#95)

「ペトロの大漁」で知られる個所です。ガリラヤ(ルカ伝ではゲネサレト)湖畔、イエスは漁師ペトロらの舟を漕ぎ出させ、岸辺の群衆にむかって教えを説いている。説教を終えたイエスから「沖へ出て網を降ろしなさい」と言われたペトロは、「先生、私たちは夜通し働きましたが、何も捕れませんでした。しかし、お言葉ですから、網を降ろしてみましよう」。結果は大漁で仲間の舟にまで溢れた。驚き怖れているペトロに「今から後、あなたは人間をとる漁師になる」とイエスは告げ、ペトロは仲間とともに「すべてを捨ててイエスに従った」、という物語です(上記データ[福音書])。

当カンタータは、この場景を思い浮かべながら味わうこととなります。やや観念的なノイマルクのコラール歌詞(上演用訳詞参照)が、具体的な絵になり、福音書の聖句と分かりやすく結びます。バッハの聴衆の多くが、こういう聞き方をしたのでしょう。〈ただ主に依り頼み〉(直訳「愛する神のみ心に 全てを委ねる者は」)とは、「すべてを捨ててイエスに従う」(ルカ 5, 11) ことに他ならない、と知ることだったのです。

前回とりあげた BWV 166《いずこへ 主よ 行きたもう》の終結コラールの旋律が、まさにこの〈ただ主に依り頼み〉だったことをご記憶でしょうか。これは初演の日付けが5月7日でした。今、吟味しようとしている、まさにこのコラールと同名のカンタータ BWV 93 は、その2か月後の7月9日。ライプツィヒ市民の大好きだった旋律を、彼らはふたたび耳にしています。

「コラール・カンタータ」とは、いくつかの、または全ての楽曲が、ある特定のコラール(讃美歌)の歌詞

と旋律とに基づいて作曲されたカンタータを言いますが、とくに、この第2年次の40連作では、決定的な大原則が打ち立てられました。次回へつづきます。

## 来年は、“けまん草”の創立60周年祝い

大村 恵美子 (主宰者)

この7月号月報には、華鬘(けまん)草の花の写真が現れました(P.1)。この花が、うちの月報に載るのは2度目です。「けまん」とは聞きなれない言葉ですが、仏前を飾るための花冠・首飾り様の荘厳具のことだそうです(右図)。

以前に月報で、この花に触れたときにも書いたと思いますが、私自身は、まず小学生のとき、校庭の花壇のかたすみ、鳳仙花が何かの根元に、こっそり咲いている、この珍しい形をした花を見つけて、しんそこびつくりしました。そして、こんなに美しい花を造ったのが神なら、神はずばらしいな、とひとしきり感動していたことを覚えています。



花のなかでの一番は「ばら」でしょうか。いかにも女王然として、まさに君臨している様子ですが、私が「けまん草」(当時、その名前を知る由もありません)を初めてみたときに直感したのは、「こんな素晴らしい花を地上に与えてくださって、神さま、ありがとう」という叫びでした。

数十年たった現在でも、これは全く変わりません。世の中ではどんな評価がなされているのか、配慮してみたこともありませんが、「ばら」の明らかな女王ぶりからみると「けまん草」は、いかにもどこかの片隅に、目立たぬ姿で存在しています。「鯛釣り草」とも云われるようですが、(草)であることに変わりありません。

この譬喩で、バッハの作品を歌う演奏グループでも、プロならば〈花〉、アマチュアの「東京バッハ合唱団」は〈草〉に当たるのでしょうか。来年には創立60周年を迎える私たちの合唱団は、自費で5回も海外演奏旅行を実施し、バッハの本場・ライプツィヒでも他のどこでも、「また来てください。次はいつごろですか?」と、大歓迎されました。J.S. バッハに対する解釈・理解が間違っていなかったわけだと、大変自信を持つことができました。

これまで活躍してきた団員も私も、当然、老化し続けているわけですが、あまり先のことまで欲張らず、この内容の深い J.S. バッハのみをひたすら歌い込む合唱団を、何が何でも存続させなければと焦ることなく、すべては神にお任せして、来年の60周年記念の年に向け、いっそう熱心に、謙虚に、合唱団を盛り立て進んでゆきましょう。今は、コロナ禍の影響で、顔を合わせることもできませんが、ひとりではないのです。耐え忍んで、また謳歌できる日を、楽しみに待望いたしましょう。

◆月報バックナンバーは、当団HPからご覧いただけます。  
[http://bachchor-tokyo.jp/monthly\\_newsletter/index.htm](http://bachchor-tokyo.jp/monthly_newsletter/index.htm)

## 畑を耕す

安曇野閑人 大野 博人

「別荘って、これのこと？」

思いがけない光景に私は困惑した。1990年、プラハ郊外でのことだ。

そのころ、東欧諸国を取材で走り回っていた。前年の89年夏にポーランド、ハンガリーに端を発した共産主義、社会主義独裁体制の崩壊がドミノ倒しのように続いた。チェコスロバキア、東ドイツに及び、11月にはベルリンの壁が開放された。勢いはとどまるところを知らず、反体制派の影もないルーマニアでも12月には市民が蜂起、チャウシエスク大統領夫妻は捉えられ、即決裁判で処刑された。東西の冷戦体制が幕を閉じつつあった。

人々は自由になり、各国で民主化が始まった。しかし、晴れがましい気分だけが社会を満たしていたわけではない。何の準備もなく統制経済から市場経済に放り込まれた社会は混乱を極めた。効率の悪い公営工場などが相次いで閉鎖され、失業者が急増した。暮らしの手がかりを奪われ自分の居場所を見失って、排他的な民族主義に走る人もいれば、西側の消費社会の輝きに幻惑される人も少なくなかった。

歴史が変わるときは加速度がつく。私は、想定をはるかに上回る速度で変化する社会を取材するのに追われていた。あちこちの現場を回ってルポをし、たくさんの人に話を聞いた。東ドイツの民主化運動の拠点で、かつてバッハが活躍したライプツィヒにも出かけた。文字どおり寝る時間もなかった。

そんな日々を重ねるうちに、あることに気づいた。どういうわけか金曜日の午後くらいから週末にかけて、取材したい相手がなかなかつかまらないのだ。

どうしてだろう。調べてびっくりした。多くの人が週末に都会を離れ「別荘」に出かけるから、というのだ。

絶句した。土台からひっくり返った経済や社会を一刻もはやく建て直さなければならないはずだ。日本も、経済大国として支援に協力するかまえだった。その日本の納税者の私が、週末を返上し睡眠時間も削っているのに、肝心の本人たちが、週末は「別荘」？ いったいどういうことだ。

私は、「別荘」を取材に行った。しかしプラハの郊外で見たのは、私がイメージしていた「別荘」とはほど遠い代物だった。質素というか粗末というか。小さな木造の小屋とささやかな野菜畑。その土地も借りていたようだ。

たしかに、広大な庭のある豪壮な邸宅など、独裁体制下では少数の支配階級の特権だった。抑圧され、人権も私的所有権も大きく制限されたほとんどの市民に

は無縁である。

そこにあったのは、むしろふつうの市民の避難場所なのだ気づいた。生産と流通が滞りがちな中で食生活を畑仕事で補い、つかの間、息苦しい監視社会からも逃れる。私が取材に訪れたのは独裁体制が崩壊したあとだったけれど、明日がどうなるか、まだわからなかった。不安な日々を耐え抜くためにも必要だったにちがいない。

ヴォルテールの傑作『カンディード』を思い起こす。故郷から追放された青年が、世界を転々としながら災害や戦禍、略奪など数々の途方もない試練に見舞われる物語。たくさんものを失い、最後にたどり着いたところで畑仕事のほかにはやることのない退屈な暮らしが始まる。

仲間の哲学者が、数々のひどい出来事も苦難も、落ち着いた今の暮らしにつながっているのだから、万事これで良かったのだ、と予定調和の理屈を持ち出す。それに主人公がこう答える。

「けっこうなお話ですが、とにかくぼくらは自分たちの畑を耕さなければ」

独裁政権のうさん臭いイデオロギーを押しつけられていた人々も自分の畑で、同じ言葉をつぶやいていたのかもしれない。「けっこうなお話ですが、とにかくぼくらは自分たちの畑を耕さなければ」と。身も心も支配下に置こうとする不条理な力へのささやかな抵抗。

東欧での経験以来、私の中に小さな疑問が消えずに残った。私には「自分の畑を耕す」場所はいらないのだろうか。独裁体制のイデオロギーへの服従を強いられているわけではないけれど、同じようにあやしげな予定調和の言説に毎日さらされているのではないか。

「経済成長こそが社会を安定させる」「市場メカニズムの導入で社会問題のほとんどは解決できる」「科学技術の進歩が人類に平和をもたらす」「グローバル化で世界中が豊かになる」……。

私は、移住した安曇野で小さな畑を借りて野菜を作り始めた。そこでつぶやいてみる。

「けっこうなお話ですが、とにかくぼくらは自分たちの畑を耕さなければ」。



■私が耕している安曇野の畑 (写真も筆者)